



知事が行く!  
突撃取材! Part2  
～三重のひと～

第2回 ～里山から放つ感性と文化～

# 劇場 テアトル ドゥ ベルヴィル

## インタビュー詳細版

(聞き手)

三重県知事 鈴木英敬

(お話いただいた方)

第七劇場

(代表・演出家) なるみ こうへい 鳴海 康平さん  
こすげ ひろし 小菅 紘史さん  
さくはら まゆ 菊原 真結さん



《左からさくはら まゆ 菊原 真結さん、こすげ ひろし 小菅 紘史さん、なるみ こうへい 鳴海 康平さん》

知事：まず、第七劇場 代表の鳴海さんにお伺いします。2014年に活動拠点を東京から三重に移された理由を教えてください。

鳴海：東京は情報にあふれていて便利な街ですが、物事が移り変わるサイクルも非常に早くて、そのスピードとの相性の良し悪しがあります。私たちは、ゆっくり流れる時間の中で長いスパンで、ものづくりに専念したいと考え、最適な場所を探していました。さまざまな地域を見てきた中で、津市美里町がものづくりに適していると感じました。私は北海道出身なので自然の多い土地が好きですし、雄大な風景を見ていると落ち着くんです。また、ここに住んでいる方々も魅力的ですしね。

知事：三重を選んでいただき、ありがとうございます。この地で活動をスタートした手応えは、いかがですか。

鳴海：地域の方々に少しずつ知ってもらえるようになり、来場される方も着実に増えています。これ

からも、子どもから、おじいちゃん、おばあちゃんまで、さまざまな世代に舞台を楽しんでもらえる工夫をしていきたいですね。一方で、もっと私たちの活動を知ってもらえるようPRしていきたいと思います。

知事：三重県での暮らしは、いかがですか。

鳴海：私と小菅さんは東京から引っ越してきました。引っ越した家には薪ストーブがあったのが印象的でした。暖をとるために薪を用意して乾かし、火をつけて番をするなど、結構、手間がかか



ります。その作業は面倒なのですが、とても楽しく、人間らしさにあふれているんじゃないかと感じました。都市部では近所のコンビニエンスストアで何でも簡単に手に入りますが、簡単さと引き換えに失っていることもあると体感しています。

**知事：**三重県の食べ物は、いかがですか。

**鳴海：**海鮮がおいしいですね。それと私は肉が好きなので、おいしい肉を食べられることが何より嬉しいです。テレビのリポーターが「お肉が口の中で溶けていく」という表現をよくしていますが、大げさな表現ではなく本当のことなんですね。初めて食べたときは感動しました。

**知事：**三重県は、47都道府県のイメージ調査で「牛肉がおいしい県No.1」になりました。

**鳴海：**肉がおいしいイメージはありますよね。

**知事：**ところで、鳴海さんが舞台芸術を通じて多くの人に伝えたいメッセージは。

**鳴海：**フランスやドイツ、イギリスなどヨーロッパの先進国では、経済発展とともに文化的発展を大切にしています。日本は経済的に豊かになったといわれますが、予算上も社会機能としても文化的な発展はまだ。日本も、経済も大切ですが、同じくらい文化的な先進国をめざさなければならぬと思います。そのためには、私たち芸術家の役割は重要です。その意味でも、世界にも通用するものづくりを、これからも続けていきたいと考えています。



**知事：**どのようなテーマで活動していくお考えでしょうか。

**鳴海：**現在、世界でも日本でも、多様性の意義が叫ばれています。社会には多くの課題がありますが、多様性そのものであるアートの側からいろいろな視点を提示していきたいと考えています。また、芸術文化は多様な考えを受け入れ、認め合う入口やきっかけになります。多様な世界の見方を示すのが芸術家の仕事のひとつだと思います。



**知事：**本当ですね。鳴海さんの考えに深く共感します。今年開催される伊勢志摩サミットで、三重県から発信する大切なメッセージは、寛容に受け入れあうです。そもそも日本の神道は八百万の神やおよろずとあって、多様な神の存在を受け入れています。三重県の伊勢神宮から生まれてきた精神性は、人種や性別、世代などを越えた多様な存在を受け入れていく寛容さがありますよね。

鳴海：私たちと三重県では、共通の考えがあるのですね。

知事：次は小菅さんにお聞きします。小菅さんも三重県に引っ越して演劇をされていますが、ご自身が考える演劇の魅力について教えてください。

小菅：人間は、よく分からない生き物だということを感じさせてくれるのが演劇だと思います。よく知っている人でも演劇をすると、「この人、こんなこと言うんだ。こんな行動をとるんだ」という発見ができます。

知事：その人の未知の側面を発見できるというわけですね。小菅さんは三重県での生活は、いかがですか。

小菅：僕は登山が趣味で、<sup>きょうがみね</sup>経ヶ峰に時々登ります。頂上から見た鈴鹿山脈や伊勢湾の雄大で美しい風景は、ひと目見て素晴らしいなと思いました。広い海、山々の美しい稜線。それに比べて街は小さく、そこで小さなことを、くよくよ考えている自分が馬鹿らしくなってきます。

知事：山登りとは素敵な趣味ですね。食べ物はいかがですか。

小菅：肉や海鮮もおいしいですが、近所の方にもらう野菜やお米がとても素朴で、おいしいというだけじゃなくて、嬉しいや楽しいという気持ちも一緒にいただくことができるのがすてきです。

知事：ありがとうございます。それでは菊原さんにお聞きします。菊原さんは愛媛から通っていらっしゃるようですが、そこまで演劇を追求する魅力を教えてください。

菊原：私は考えるよりも、先に行動しちゃうタイプなんです。演劇が好き、第七劇場が楽しいという感情があって、いつも愛媛から通っています。もちろん好きだけじゃ続けられないんですが、舞台上に立ったときの心地よい緊張感が原動力のひとつです。舞台上では本当の自分と、演じている役の自分と、二人の自分が存在します。そんな不思議な状況を感じられるのも魅力ですね。あと、私たちの劇団の作品は「美しい」と言ってくれる方が多くて、その世界の中に私も存在していることも嬉しいです。



知事：菊原さんは愛媛から三重に移住しないんですか。通うのは大変でしょう。

菊原：難しい質問ですね。今のスタイルは、生活と表現活動のバランスがとれているんです。第七劇場が東京にアトリエを持っていたときは東京に住んでいたのですが、拠点を三重に移したときに私は実家の愛媛に帰りました。家業の仕事を手伝っているので、ツアー公演のときなどに、ある程度融通が利きやすいのも大きいですね。

知事：家族みんなで移住するというのはどうでしょうか。そういう方々のサポートをするのも私たちの役目ですからね。

菊原：そんなサポートがあるのは驚きです。ぜひ前向きに検討したいです。

知事：三重県で、おすすめの場所はどこでしょうか。

菊原：稽古や公演で三重県に長期滞在しているときは、車ですてきな公園やカフェを探しに出かけています。

知事：今までで一番良かった場所はどこですか。

菊原：(津市中心部の) フェニックス通りの本屋さんがすてきでした。

知事：フェニックス通りは私もよく通ります。行ってみたいですね。

菊原：ぜひぜひ。

知事：それでは最後に、鳴海さんにお伺いします。第七劇場または劇場テアトル ドゥ ベルヴィルの今後の目標をお聞かせください。

鳴海：私たちのものづくりをする拠点として、この地域の、そして三重にとっての文化拠点のひとつになることです。また、他のアーティストや若い人にとっても拠点でありたいと思います。そして、気軽にふらっと立ち寄れる場所にしたいですね。第七劇場はこれからも国内外で作品を発表していきます。劇場テアトル ドゥ ベルヴィルでは春と秋にシーズンプログラムを開催しています。劇場体験を通じて多様な表現にワクワクしてもらえたらと願っています。



知事：そういう拠点になることを期待しています。

鳴海：芸術表現はもちろんですが、社会にも人生にも、正解はひとつじゃなくてたくさんあります。ひとつに固執して他を否定していると文化が貧しくなります。多様性を受け入れるという意味でも、さまざまな人種、国、世代、性別、年齢の方々がここに集まって、同じものを見て交流し、お互いの価値観を認め合う場にしたいですね。

知事：昨年の夏にフランスに行った時に、シャルル・ド・ゴール空港から車で30分の場所に、世界の芸術家が集う場所がありました。そこには、お城の跡地のようなところに寝泊まりする施設があります。例えば、バイオリニストが2ヵ月間滞在して練習し、ダイニングのような小さな部屋でコンサートを開いたりしています。パリからも近いのですが、都会の喧騒けんそうから離れた静かな雰囲気の中で、多くの芸術家が感性と技術を磨いていく場になっていました。この地も、そういう場所になればいいなと思います。

鳴海：そうですね。そのような場所をめざしていきます。

知事：最後に県民の皆さんにメッセージをお願いします。

鳴海：劇場での体験は、目に見える「物の



豊かさ」ではなく、心を豊かにするきっかけにあふれています。自分と他の人の感想はきっと違います。その違いを楽しむことで価値観が刺激され、視野が広がる瞬間があります。私たちは三重県に引っ越してきてまだ間もないですが、県民の皆さんにもっと知っていただき、劇場でお会いできればと願っています。皆様のご来場をお待ちしています。

知事：注目しています。がんばってください。

一同：ありがとうございました。



テアトル ドゥ ベルヴィル…「ベルヴィル」はフランス語で「美しい里」。直訳すると「美里の劇場」となります。

※インタビューの内容は、読みやすさの観点から一部要約等を行っています。

※記載内容、写真の無断転載を禁じます。

※内容に関するご意見・お問い合わせは、三重県戦略企画部広聴広報課まで

〒514-8570三重県津市広明町13

☎ 059・224・2788 FAX 059・224・2032

E-mail koho@pref.mie.jp